



薬の伝言板 パーキンソン病

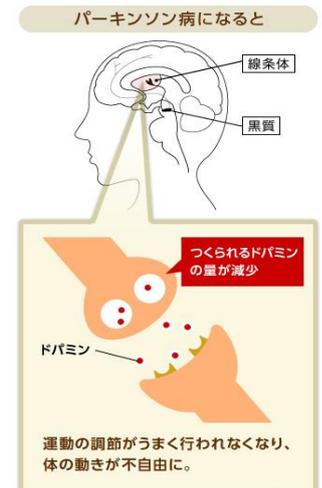
No.271 2020年6月

丸子中央病院 薬局

パーキンソン病は、手足の震えや筋肉のこわばりなど、運動機能に障害が現れる病気です。50～60代で発症することが多く、高齢になるほど発病する確率が高まるといわれています。そのため、高齢化が進むにつれて、患者数も増加すると予想されています。

パーキンソン病の原因

私たちの体の動きを調節しているのが、神経伝達物質の「ドパミン」です。ドパミンは、脳の「黒質」にある「ドパミン神経」で作られています。パーキンソン病になると、このドパミン神経が減少し、ドパミンが十分につくられなくなります。その結果、運動の調節がうまくいかなくなり、体の動きに障害が現れます。



パーキンソン病の症状

パーキンソン病の症状は、運動症状と非運動症状に分けられます。

●運動症状

運動症状では、パーキンソン病の四大症状と呼ばれる以下の症状が出ます。

- ①安静時振戦（安静時に手、足、あごなどの震え）
- ②動作緩慢（動作が遅くなり少なくなる）
- ③筋固縮（筋肉のこわばり）
- ④姿勢反射障害（身体のバランスが悪く倒れやすくなる）

この他に「すり足になる」「一歩目がなかなか踏み出せない」などの特徴的な歩き方が現れることもあります。

安静時振戦



動作緩慢



筋固縮



姿勢反射障



症状は体の片側から出始め、次第に反対側に広がっていき、ゆっくりと進行します。

●非運動症状

- 自律神経症状（便秘、排尿障害、発汗異常、起立性低血圧、など）
- 精神症状（うつ病、幻覚、妄想、など）
- 睡眠障害（不眠、中途覚醒、など）
- 認知機能障害（外からの刺激に鈍くなる、判断力や記憶力の低下、など）

パーキンソン病に使われる薬

現在のところ、パーキンソン病の進行を完全に食い止め完治させる薬はないのですが、パーキンソン病の症状を軽くする薬が使われています。

種類	当院の採用薬	作用
レボドパ製剤	マドパー	ドパミンを補う成分と、その成分を脳内へ効率良く移行させる成分が配合されています
ドパミン受容体作動薬	プラミペキソール ニュープロパッチ	ドパミン受容体に作用し、ドパミンのように働きます
MAO-B 阻害薬	エフピー	ドパミンの効き目を長くします
COMT 阻害薬	エンタカポン	レボドパが効率よく脳内に届くようにします
抗コリン薬	ピペリデン トリヘキシフェニジル	神経に情報を伝達する物質のバランスを整えます
その他	アマンタジン	ドパミンの放出を促進します

※パーキンソン病の薬の治療薬は急に減量・中止しないでください。筋固縮が強くなり、高熱が出て重症化することがあります。

★レボドパ製剤を長期的に使用することによって起こってくる症状がいくつかあります。

- ウェアリング・オフ現象：薬の効いている時間が短くなり症状が1日の中で変動する
- オン-オフ現象：急に動きが良くなったり(オン)、悪くなったりする(オフ)。
- 不随意運動(ジスキネジア)：体の一部が勝手に動く、しゃべりにくい、じっとできないなどの症状が現れる。

薬物療法以外の治療法

●リハビリ

- ・歩行障害などの改善をはかる理学療法
- ・日常生活動作の向上をはかる作業療法
- ・音声障害や嚥下障害の改善をはかる言語聴覚療法

●手術療法

薬で症状をうまくコントロールできない場合、脳の手術を行うことがあります。

「手足が震える」「動作が遅くなる」といった症状が出たら、パーキンソン病かもしれません。早期の薬物療法や運動療法である程度の運動機能を維持することができるため、パーキンソン病に当てはまる症状を感じたら、早めに専門医に相談しましょう！

